

東大阪市内出土の製塩土器

才 原 金 弘

I はじめに

製塩土器の調査研究は、近藤義郎氏によって早くからなされ、その業績は今日の研究の基礎となっている。^①氏は、特に備讃瀬戸を中心にして研究され、喜兵衛島発掘調査団に始まっている。その後、若狭では石部正志氏らによる研究がなされている。^②また、紀伊・淡路を中心として、森浩一・白石太一郎氏らによる研究もある。^③氏らの調査研究によって、備讃瀬戸・若狭・紀淡の地域では比較的早くから実態が判っていた。これらは、製塩作業を直接おこなう生産跡を中心とした調査研究であった。

近年、その場で製塩作業がおこなわれたと考えにくい、旧海岸線から遠く離れた地域からの製塩土器の出土例が増加しつつある。これは、発掘調査件数が増えたためであるが、反面、内陸部での製塩土器の研究も進展しつつある。野島稔氏は、大阪府下における製塩土器の出土遺跡^④を詳細に調べて集成されている。また、岡崎晋明氏は、奈良盆地を中心にした製塩土器の研究を実施され、詳細な分類をおこなわれている。^⑤

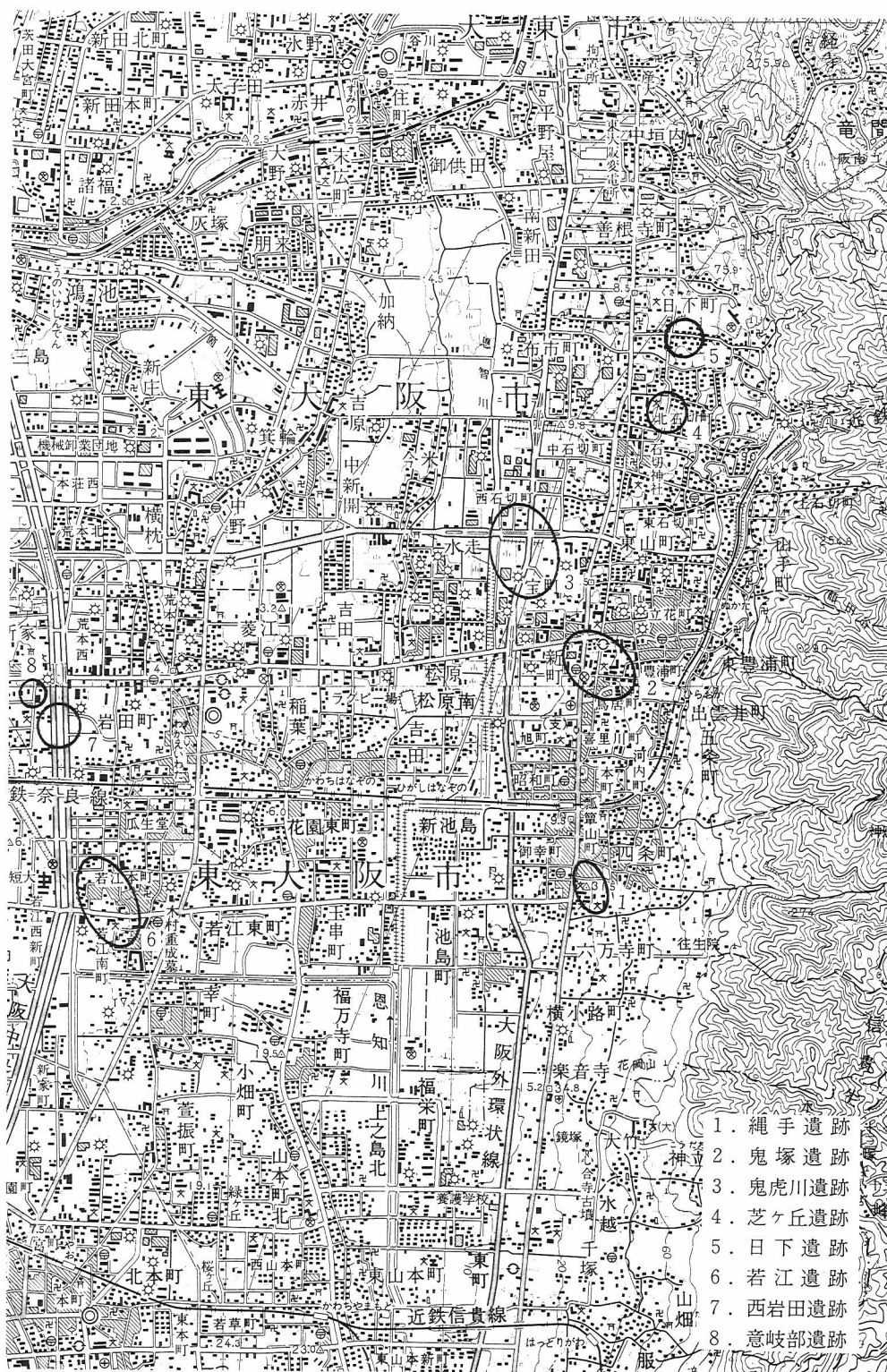
このように内陸部における製塩土器の出土例が増加しているが、東大阪市内でもその例外ではない。特に5世紀中～6世紀末までの資料の発見例は多くなっている。今回、内陸部において製塩土器を研究されている研究者の方々の一資料となれば幸いと思い、東大阪市内より出土したものを集成し紹介することにした。

II 製塩土器の出土した遺跡

東大阪市内では、扇状地及び平野部に立地する計8遺跡から製塩土器が出土している。当地域では、早くから日下遺跡^⑥と縄手遺跡からの出土例が知られていた。現在、製塩土器の出土例は14例にも及んでいる。以下、各遺跡ごとに出土状況などの概略について記したい。

縄手遺跡

縄手遺跡は、扇状地上に立地し、標高15～20mである。現在の行政区画では南四条町に相当する。縄手小・中学校を中心にして広がっているが、今日ではほとんど住宅地となっている。当遺跡は、縄文時代後期～古墳時代の複合遺跡である。昭和26年、縄手中学校校舎建設工事の際に弥生土器・須恵器・土師器が採集され周知された。その後、昭和35年には弥生時代後期の壺棺2基、昭和44・45年には、縄文時代後期の住居群も検出された。製塩土器は、昭和48年の



第1図 遺跡位置図 (1/50,000)

縄手小学校校舎建設工事に伴う調査の際に出土した。地表下 0.7m のピット内とその周辺部からであった。共伴遺物は、古墳時代の須恵器・土師器があり、5 世紀後半の時期である。製塩土器は 151 点出土した。また、昭和52年の縄手農業協同組合建設工事に伴う調査からも出土している。当調査では、縄文時代後期～古墳時代の遺物を含む、二次堆積層からであった。製塩土器は15点出土した。昭和55年には、縄手中学校校舎建設工事に伴う調査が実施され、この時にも出土している。地表下 0.2m が遺構面で幅 5 m、深さ 0.5m の溝を検出した。この溝及びその周辺部から製塩土器が出土した。共伴遺物は古墳時代の須恵器・土師器・獣骨・種子があり、5 世紀後半～6 世紀末の時期である。製塩土器は 462 点出土した。第 3 図 1～32 は昭和55 年調査分、第 4 図 52～62・64・65 は昭和48 年調査分、第 4 図 63 は昭和52 年調査分である。

鬼塚遺跡

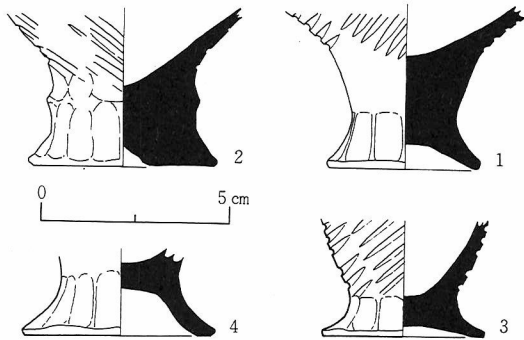
鬼塚遺跡は、長尾川によって形成された扇状地上に立地し、標高20～30m である。現在の行政区画では、箱殿町、新町、宝町、南荘町一帯に相当する。古くより住宅・工場地となっている。当遺跡は、縄文時代晩期～平安時代の複合遺跡である。昭和35年、枚岡電報電話局建設工事の際に縄文晩期と弥生前期の土器が採集され著名な遺跡となった。その後、弥生時代後期の家屋の焼けた竪穴住居址一棟と平安時代の柱穴も発見されている。製塩土器は、昭和52年枚岡西小学校プール建設工事に伴う試掘調査で出土した。遺構等は認められず、地表下 1.5m の二次堆積層より弥生後期～古墳時代の須恵器・土師器と混在して出土した。製塩土器は数点出土した。^⑦

鬼虎川遺跡

鬼虎川遺跡は、扇状地末端から平野部へ移行する所に立地し、標高 5～10m である。現在の行政区画では弥生町～水走一帯に広がっている。周辺部は、ほとんどが水田として残っている。昭和38年、外環状線建設工事に伴う府水道管埋設工事が実施され、当遺跡は周知された。この際に、弥生時代中期の土器・石器が採集されている。昭和41年にも木棺が採集されたが、その後、本格的な調査は昭和50年代まで実施されなかった。昭和50年以降数回にも及ぶ調査がおこなわれた。その結果、弥生時代前期～中期末の遺構が検出され、当遺跡が大集落を形成していたことが明らかになってきた。昭和52年、車展示場建設工事に伴う調査で製塩土器が出土した。^⑧地表下 3 m の黒色粘土層から出土し、遺構は認められなかった。共伴遺物は木片のみで、時期を比定できる他の土器は出土しなかった。当遺跡の弥生時代遺物包含層より上には、古墳～奈良時代の二次堆積層があることが今までの調査で明らかになっている。製塩土器が出土した層も弥生時代の遺物包含層より上であった。層位的、形態から考えて5 世紀中葉以降と考えられる。製塩土器は 1 点出土した。第 5 図 70 である。

芝ヶ丘遺跡

芝ヶ丘遺跡は、辻子谷によって形成された扇状地上に立地し、標高20～30m である。現在の行政区画では中石切町～日下町一帯に広がる。今日では、約 7 割が住宅地となっている。当遺跡は、縄文時代後期～古墳時代の複合遺跡である。昭和34年、近鉄住宅建設工事に際して弥生



第2図 製塩土器実測図

時代後期の土器が採集され、周知された。また、昭和37年にも弥生時代後期の土器と古墳時代の須恵器・土師器が採集された。昭和47年～54年にかけて石切中学校校舎増築工事に伴う調査が3回実施された。製塩土器は、昭和50年と54年の調査で出土した。共伴遺物は、古墳時代の須恵器・土師器・滑石製勾玉などがある。これらは遺物包含層及び遺構内から出土した。遺構は井戸2基とピット群を検出した。遺構面は0.3mで、井戸は径1m、深さ1.6mと径0.8m、深さ1.5mの素掘りであった。昭和50年の調査では17点、昭和54年の調査では344点出土した。遺構内出土の共伴遺物から5世紀中～末の時期である。第4図35は昭和50年調査分、第4図33・34・36～51は昭和54年調査分である。

日下遺跡

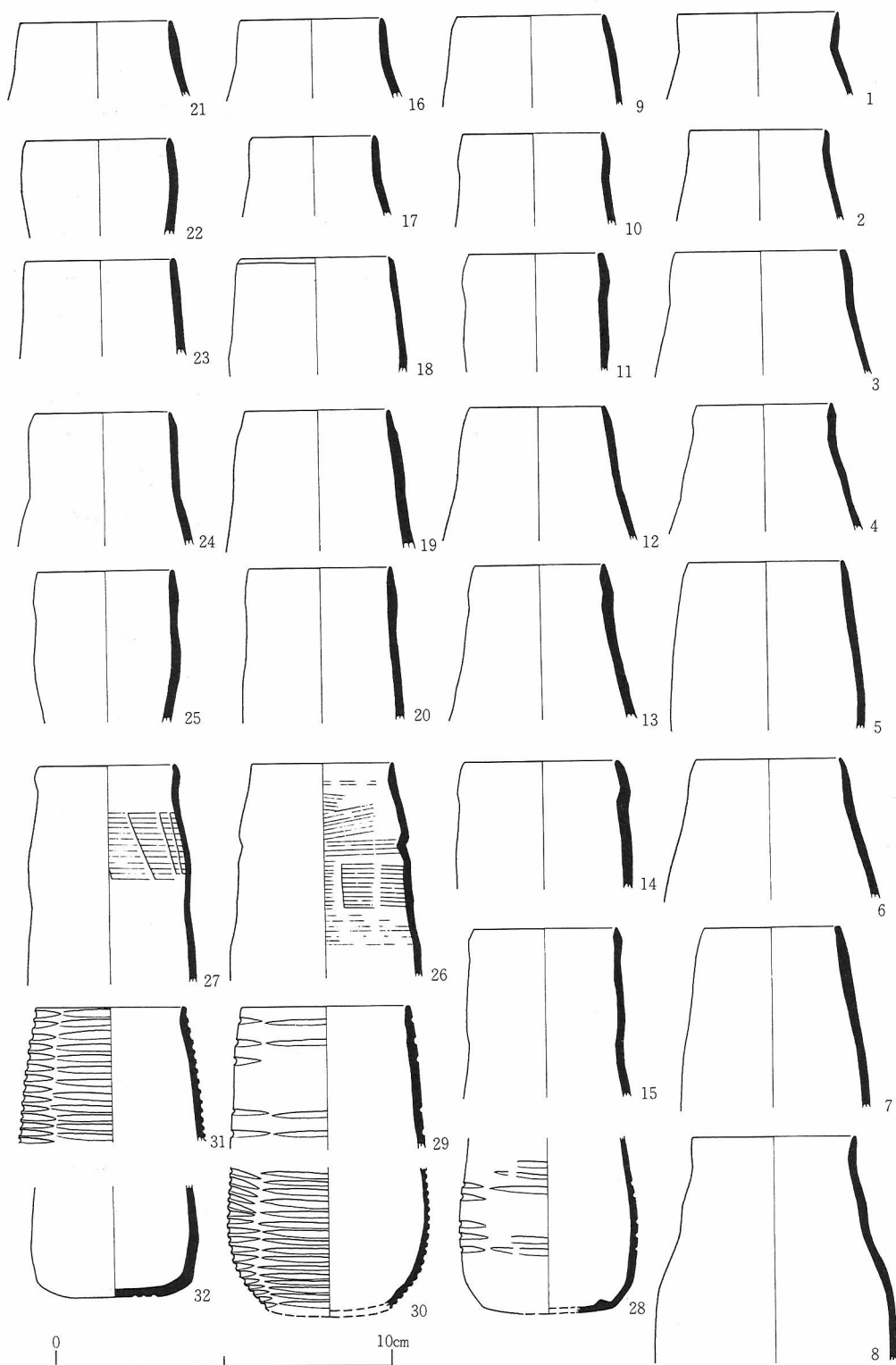
日下遺跡は、日下川の北岸の台地上に立地し、標高20m前後である。現在の行政区画では、日下町に相当する。遺跡の一部は指定されているが、ほとんどが住宅地となっている。当遺跡は、縄文時代後期～平安時代の複合遺跡である。大正14年に調査がなされ、貝塚であることが確認されている。その後、帝塚山大学教授堅田直氏によって昭和41年に調査が実施された。この際に製塩土器が古墳時代の須恵器・土師器・漢式系土器と共に出土している。昭和53年、孔舎衙東小学校校舎建設工事に伴う試掘調査が実施された時にも製塩土器が出土した。調査地点は谷筋あたり、地表下2mの二次堆積層からであった。土器は古墳時代～平安時代のものが混在していた。製塩土器は16点出土している。第5図69・76～78は昭和53年調査分である。

若江遺跡

若江遺跡は河内平野のほぼ中央に位置し、標高5m前後である。現在の行政区画では若江本町、若江北町、若江南町一帯に相当する。旧村を中心にして周辺部は水田が少し残っている。当遺跡は弥生時代～室町時代の複合遺跡である。昭和9年に楠根川が改修され、弥生土器・須恵器・土師器が出土し周知された。その後、数回に及ぶ調査が実施され、若江寺・若江城関係の遺構が明確になりつつある。製塩土器が出土したのは、昭和53年府道四条・長堂線拡張工事に伴う調査からである。地表下0.6mのピット内より製塩土器13点が出土した。昭和54年の同工事に伴う調査の際にも出土した。地表下1.5mの二次堆積層からであり、この層内には庄内式～布留式の土器を含んでいる。製塩土器は1点出土している。第2図1は昭和54年調査分、第5図71は昭和53年調査分である。

西岩田遺跡

西岩田遺跡は、河内平野のほぼ中央に位置し、標高5m前後である。現在の行政区画では、



第3図 製塩土器実測図

西岩田二丁目に相当する。周辺部はマンション建設の増加によって住宅地化しつつある。当遺跡は昭和39年、水道管理設工事中に古墳時代の須恵器・土師器が採集され周知された。その後、昭和51年にガス管理設工事に伴う調査を中央環状線に沿って実施した。地表下2mで径1.2m、深さ1mの井戸を検出し、この中から製塩土器が出土した。共伴遺物には古墳時代の須恵器、土師器があり、6世紀前半の時期である。製塩土器は13点出土した。地表下2mの二次堆積層からも庄内式の土器に伴って製塩土器1点が出土した。また、昭和53年、マンション建設工事に伴う調査が実施された^⑨。この時、地表下3mで円形周溝を検出した。円形周溝周辺の包含層より製塩土器2点が出土した。共伴遺物は庄内式の土器・土錘・木製品などがある。第2図2は昭和51年調査分、3・4は昭和53年調査分である。

意岐部遺跡

意岐部遺跡は、西岩田遺跡の北200mに位置し、標高5m前後である。現在の行政区画では御厨に相当する。周辺部はほとんどが住宅地となっている。当遺跡は古墳時代～平安時代の複合遺跡である。昭和15年に古墳時代～平安時代の須恵器・土師器が採集されただけで、実態の不明な遺跡であった。製塩土器は、昭和53年マンション建設工事に伴う調査で出土した。地表下1mで幅10～30cm、深さ5～30cmの溝約30本とピット数ヶ所を検出した。この中より製塩土器は出土し、共伴遺物は古墳時代の須恵器・土師器であった。共伴遺物から6世紀後半のものと考えられる。製塩土器は38点出土した。第5図66～68・79である。

Ⅲ 製塩土器の分類

庄内式～布留式の製塩土器

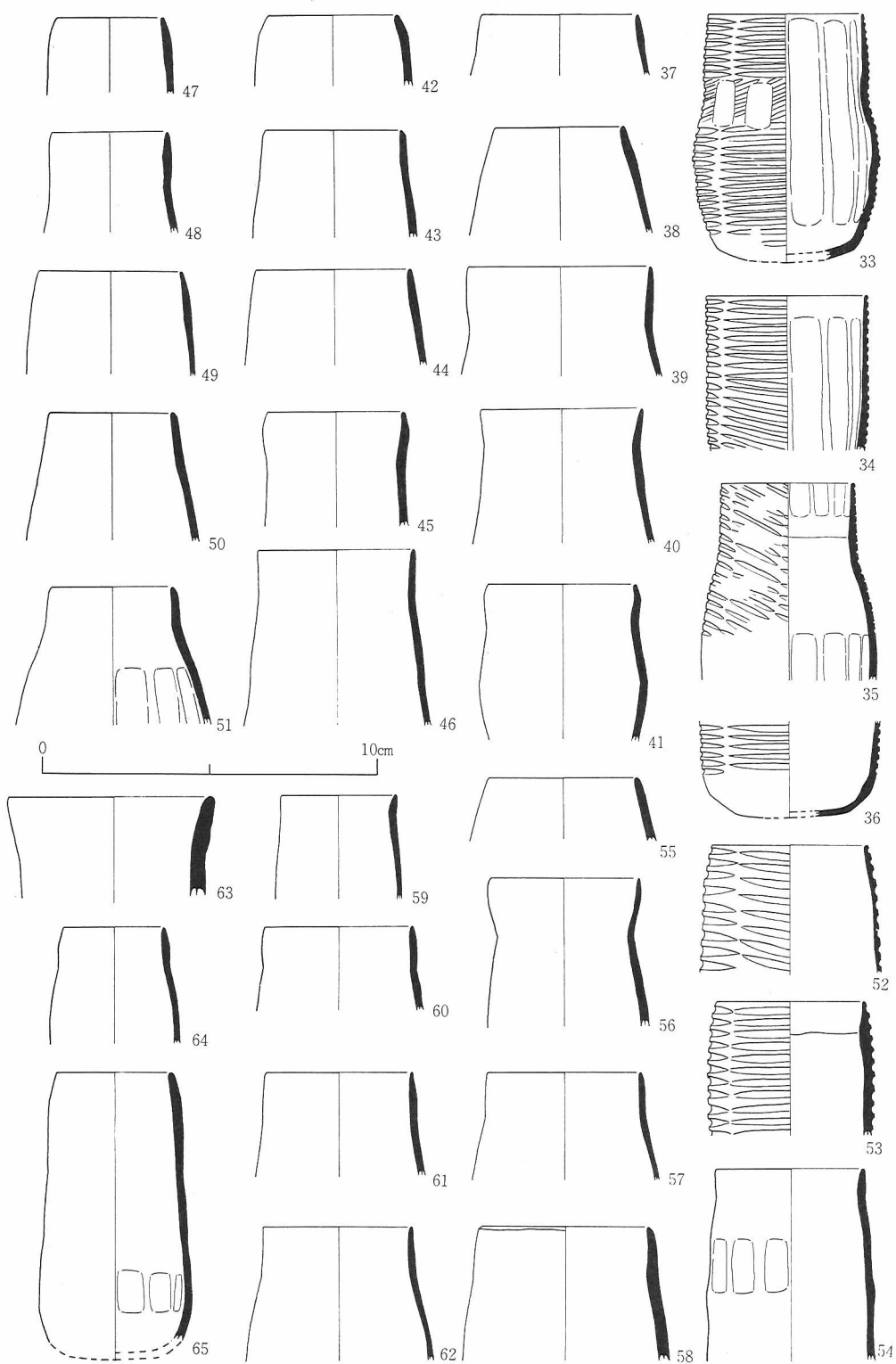
この時期の製塩土器は4例出土しており、西岩田遺跡・若江遺跡からである。いずれも底部しか残っていない。底部はわずかにくぼむ平底で、胴下半部が外方へ広く伸びるものと比較的上方へ伸びるものがある。胴部外面はタタキを施し、内面はナデ調整する。また、底部外面はナデ調整し、指頭圧痕が残る。

5世紀中～6世紀末の製塩土器

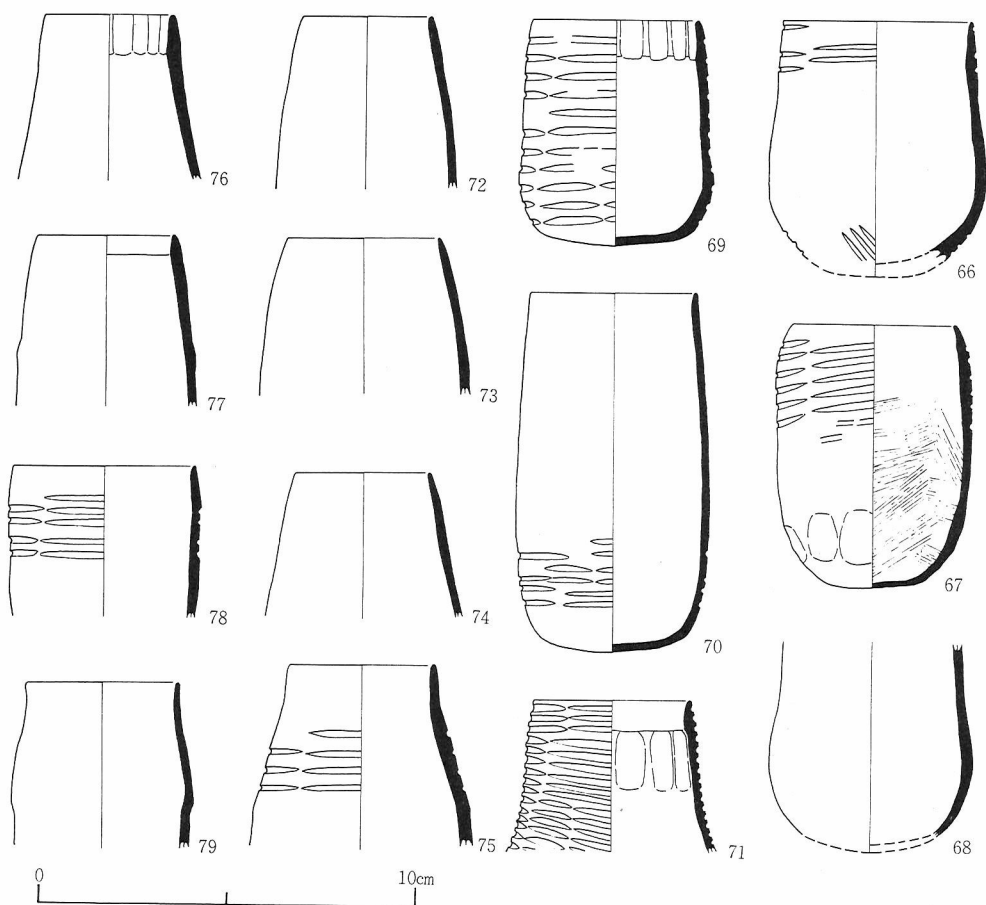
当時期の製塩土器は大部分が細片となって出土し、全形がわかるものは少ない。今回、実測可能なものではできる限り計測し、掲載した。大部分のものは器形では分類が不可能なので、器体内外面の調整技法によって分類をおこなった。そのため、器形の説明は概略にとどめて説明したい。

今回、全形を知ることができるものが6点出土している。器高は最も高いもので9.5cm、最も低いもので6cmを測る。口径は約3～5cmで、4cm前後のものが多い。器壁は2～3mmを測る。平底にちかい丸底の底部から胴部に至り、口縁部が外反するもの、内傾するもの、直口するものがある。最も多いのは内傾するものである。口縁端部は尖りぎみに終るもの、丸く終るもの角ばって終るものがある。

製塩土器の観察結果から、調整技法にはナデ（以下、ヨコナデを含む）、タタキ、ハケメ、貝



第4図 製塩土器実測図



第5図 製塩土器実測図

殻条痕が認められた。内外面の調整技法によって、A～Fの6タイプに分類をおこなったので、以下各タイプの説明をしたい。

Aタイプ 内外面をナデ調整するものである。内面は丁寧にナデ調整するが外面は比較的粗雑に調整し、そのため指頭圧痕の残るものが多い。

Bタイプ 外面の調整はAタイプと同様であるが、内面をヨコ方向のハケメ調整する。ハケメ原体は7～8/cmものが多い。

Cタイプ 外面の調整はAタイプと同様であるが、内面を貝殻によって調整する。

Dタイプ 外面はタタキによって調整し、内面はナデ調整する。外面のタタキは平行か右下がりのものが多い。タタキを施したため内面に凹凸が著しく残るものもある。タタキ原体は4～5/cmのものが多い。

Eタイプ 外面の調整はDタイプと同様であるが、内面をハケメ調整する。

Fタイプ 外面の調整はDタイプと同様であるが、内面を貝殻によって調整する。

各タイプごとの総点数は表1にまとめた。点数の勘定の基準は、以下のおこなった。

遺跡名 \ タイプ	A	B	C	D	E	F	合 計
縄 手 遺 跡(昭和48年)	118	0	1	32	0	0	151
縄 手 遺 跡(昭和52年)	13	0	1	1	0	0	15
縄 手 遺 跡(昭和55年)	336	3	4	118	1	0	462
鬼虎川遺跡	0	0	0	1	0	0	1
芝ヶ丘遺跡(昭和50年)	10	0	0	7	0	0	17
芝ヶ丘遺跡(昭和54年)	279	1	1	61	1	1	344
日 下 遺 跡	11	0	0	5	0	0	16
若 江 遺 跡	1	0	0	12	0	0	13
西岩田遺跡	9	0	0	3	0	1	13
意岐部遺跡	26	0	0	11	1	0	38
合 計	803	4	7	251	3	2	1070

表1 5世紀中以降の製塩土器出土点数

が確認されている。庄内期のものは、出土点数も少なく1遺跡から数点をかぞえるほどしか出土していない。一方、5世紀中～6世紀末の製塩土器は、破片ではあるが出土点数も比較的多い。東大阪市内の5世紀中～6世紀末の集落と考えられる遺跡からは、ほとんど出土例がある。直接、製塩作業に伴うような遺構は認められておらず溝・井戸・ピットなどに遺棄された状態が多い。大部分は細片となって出土するが、まれに全形を知ることができるものもある。

5世紀中～6世紀末の製塩土器について若干記したい。5世紀中～6世紀末のものを6タイプに分類し、各遺跡ごとの表1にまとめた。この表1をみると、A・Dタイプが当地域では大部分をしめている。B・C・E・Fタイプのものは各遺跡を合わせても数えるほどしか出土していない。例えば、比較的出土量の多い縄手遺跡（昭和55年）では、A・Dタイプ合計454点、他のタイプ合計8点である。また、芝ヶ丘遺跡（昭和54年）でも、A・Dタイプ合計240点、他のタイプ合計4点である。A・Dタイプは全体の99%を占め、他が1%以下の状態である。

AタイプとDタイプの比率をみると、例えば、縄手遺跡（昭和55年）ではAタイプ336点でDタイプが118点である。芝ヶ丘遺跡（昭和54年）ではAタイプ279点、Dタイプ61点である。両遺跡の比率は、おおむね3：1でAとDタイプがある。また、全遺跡の総合計では、Aタイプ803点、Dタイプ251点であり、上でみた2遺跡の傾向と同様の比率を示す。

各地域の調整技法の差が、現在までの研究で明らかになりつつある。今回、おこなった分類が各地域性を示すかどうかは知らない。また、製塩土器は当地域でつくられていない。例をとると、縄手遺跡（昭和55年）の調査で出土した煮沸用の甕・土釜などは、胎土中に当地方特有の有色鉱物である角閃石・雲母・長石を含むものが多かった。これらは、5世紀後半～6世紀末の間、当地域でも依然として土器をつくっていたことがうかがえる。それに比して共伴した製塩土器の胎土中には、これらの有色鉱物が認められない。このことから製塩土器は、他地域からの搬入品と考えられる。また、各タイプが今後の研究で地域性を示すようになるとしたな

1辺が5mmより小さいものと、風化のため調整技法の観察が不可能なものは除いた。また、接合できたもので、例えば10点の破片からなるものでも総合して1点として勘定した。そのため表1の点数は個体数を示すものではない。

Ⅳ まとめ

東大阪市内から出土した製塩土器は、庄内期が2遺跡、5世紀～6世紀末が8遺跡あること

らば、当地域にはA・Dタイプが中心に搬入されたことになる。今後の各地域における製塩土器の研究に期待したい。

追記

脱稿後、新たに2例の製塩土器の出土を確認した。1例は、昭和55年の文化住宅建築工事に伴う国庫補助事業の縄手遺跡からの調査で出土している。地表下1.5mの地点より弥生後期の土器と古墳時代の須恵器が少量混じって製塩土器は出土した。製塩土器は約20～30点ほどある。また、高速鉄道東大阪線建設工事に伴う鬼虎川遺跡の調査を昭和55年7月から実施している。この調査でも、地表下2mの古墳時代の遺物包含層内より出土している。共伴遺物は須恵器・土師器などがあり、5世紀後半～6世紀の時期である。製塩土器の点数は、現在も調査中のため不明であるが、さほど多くない。

東大阪市内から出土した製塩土器は、16例になったが遺跡の数は前と同じように8遺跡である。今後、急速に資料は増加すると思われる。

注

- ① 近藤義郎 「師楽式遺跡における古代塩生産の立証」『歴史学研究』223号 1958。
「縄文時代における土器製塩の研究」『岡山大学文学部学術紀要』第15号 1962。
「古目良遺跡」『田辺文化財』8 1964。
「天草式製塩土器」『日本塩業の研究』第8集 1965。
他に氏の製塩土器に関する著書は多し。
- ② 石部正志・白石太一郎「若狭大飯」『同志社大学文学部考古学調査報告』第1冊。
- ③ 森浩一・石部正志・堀田啓一・白石太一郎・大野左千夫「若狭・近江・讃岐・阿波における古代生産遺跡の調査」『同志社大学文学部考古学調査報告』第4冊 1971。
森浩一・白石太一郎 「紀淡・鳴門海峡地帯における考古学調査」『同志社大学文学部考古学調査報告』第2冊 1968。
- ④ 野島稔 「大阪府下における製塩土器出土遺跡」『ヒストリア』第82号 1979。
- ⑤ 岡崎晋明 「内陸地における製塩土器」『橿原考古学研究所論集』第4 1979。
- ⑥ 堅田直 「日下遺跡調査概要」『考古学シリーズ』2 1967。
- ⑦ 鬼塚遺跡の資料は保管場所が不明で本稿中に点数を入れることができなかった。点数は10点以下であった。
- ⑧ 鬼虎川遺跡より出土した製塩土器は、調査会ニュースNo.9で紹介したものと同様である。調査会ニュースの縮尺は誤りである。また、その後接合をおこなった結果、一団体となった。
- ⑨ 上野利明 「西岩田遺跡出土の土師器について」『調査会ニュース』No.16 1980。